

# 月影



第 47 号

平成二十五年七月三十日発行  
浄土宗西山禅林寺派

常林院

願わざれども

草は生え

願えども

花は散る



願っても、  
願っても、  
叶わないことがある。

叶わないことを知り、  
明らかにすることを、  
「諦める」という。

諦めることを  
受け入れたとき、  
苦しみが、  
少しやわらぐ。

## 法然上人 『百四十五箇条問答』

もう そうろう

問 父母のさきに死ぬるは、つみと申し候は

いかに。

答 穢土えどのならない、前後ちからなき事にて候そうろう。父や母よりも先に死ぬのは罪であると言われて  
いるのは、いかがでしょうか。お答えします。それはこの世のさだめ、死を迎え  
るあとさきについては力及ばないものです。賽ノ河原地蔵和讃には、こんな  
なことが記されています。幼い子どもが亡くなると、三  
途の川の下流にある、賽ノ河原  
に子たちが集まり、河原の石を  
積むのです。

一つ積んでは父のため、二つ積

塔をくずし回るので。

「親より先に死なない」という  
ことは、親孝行の最たるもので  
すが、法然上人がおっしゃるよ  
うに、寿命については、人間の力  
ではどうすることもできません。  
長生きをしようと健康に気をつ  
けていても、思わぬ事故・災害  
などに出遭って、命を落として  
しまうこともあります。病気は医者に、寿命は阿弥  
陀様におまかせするしかありま  
せん。それが、「穢土のならない」。  
この世のさだめなのです。んでは母のため…と、嘆き悲し  
む家族の為に回向をします。  
しかし、夕方になると地獄の  
鬼が現れて、子たちが積んだ石  
の塔をくずしてまわります。  
鬼は、親より先に亡くなった  
子たちを親不孝者として、石

あれこれ

## 仏教用語

お盆は八月（地方により七月）に、迎え火を焚いてご先祖の霊を精霊棚に迎え、墓参りや施餓鬼の法要に参り、亡き人々を供養し、十六日に送り火を焚いて、ご先祖の霊を、再びお浄土へお送りするという行事です。

わが国では、推古帝十四年（六〇六年）

## お盆

七月十五日に齋会を設けたことからはじめられます。お盆という言葉は、盂蘭盆（うらぼん）を省略した言い方で、語源はサンスクリット語のウツランバナに由来します。

「是年ことしより初めて寺毎ごとに、四月の八日・七月の十五日に設齋（おがみ）す」

（紀・推古天皇十四年）

## 彩寺記

七月になると、寺の境内の庭に、セミの幼虫が土の中から出てきた穴が、あちらこちらに見ることができます。

穴のそばにある木の、幹や葉の裏を探してみると、セミの抜け殻があります。

時には幼虫が木に登って、成虫になろうとしているところに出逢うこともあります。

今年も、暑い夏とともに、境内にセミの鳴き声がひびき渡ります。



# お盆行事

◎ 棚経 たなぎょう

八月一日から十四日まで  
※ハガキで日時は案内済

◎ 墓回向 (当寺に墓地のある方)

墓前と本堂で回向致します。

八月五日 (月)

六日 (火)

七日 (水)

※午前七時より午前中



◎ お施餓鬼法要 せがきほうよう

各家先祖代々の供養を致します。

八月十六日 (金) 午後六時半

常林院本堂

※お申込み・お問い合わせは常林院まで

## 雑記抄

### お施餓鬼 せがき

▼今年もお盆がやって来ます。お施餓鬼は、お盆やお彼岸に各寺院で勤められる法要です。▼お施餓鬼という漢字を見てみますと「餓鬼に施す」と書きま

す。この「鬼」という字は、「オニ」のことではなく「魂」を意味します。亡くなった人の魂は、お供え物を待ちうけています。だから、魂は飢えてると考えられ、「餓鬼(ガキ)」という言葉で当てるのです。▼施餓鬼法要では参詣者にお焼香をしていただき、各家の精霊を供養します。

一年に一度、お盆の間、住み慣れた懐かしいわが家に帰省されていたご先祖さまの魂は、八月十六日に、五山の送り火に照らされながら、再びお浄土へお帰りになられます。▼常林院本堂においても、十六日の夕方からお施餓鬼法要を勤めます。燈明の明かりを送り火として、皆様と共に心を込めて、ご先祖様をお見送り致したいと思えます。

